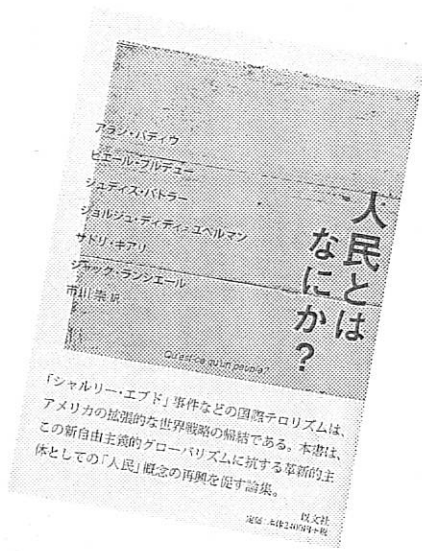


# A・バディウ他著『人民とはなにか?』(以文社)を読む

▼アラン・バディウ、ピエール・ブルデュー、ジュディス・バトラ、ジョルジュ・ディディエール・ジュルマン、サドリ・キアリ、ジャック・ランシエール著、市川崇訳『人民とはなにか?』5・10刊、四六判二二二頁・本体二四〇〇円・以文社



# 「国民」から「人民」への読み替えを

多義性=曖昧性をはらんだ《people=people》=「人民」という語をめぐる六人の論者の持論を集成

杉村昌昭

訳者は「解題」のなかで、「現在、この語『本書のタイトルに使われている「人民」という語』はせいぜいこのころ、「中華人民共和国」、朝鮮民主主義人民共和国」などの共産主義国の国名を通じ、全体主義的国家の重く、息苦しい統制社会を喚起するに過ぎないのかも知れない。しかし、ルソーの「人民主権」や……「人民戦線」といった言葉は……こうしたイメージの拘束を受けず、国家や民族などの基盤を必要としない人びとの結びつきのある方を今も伝えたいのではないだろうか」と述べて、この語のポジティブなニュアンスを喚起しているが、それにとまらせず、じつはこの「人民」という訳語の原語《people》=「ラン

ス語では《people》は日本国憲法にも深くかかわっている言葉であることを思い起さねばならぬ。それはどういふことか。私はかつて自著『資本主義と横断性』、インパクト出版会のなかに次のように書いたことがある。「日本国憲法の英語版と日本語版を比較対照してみると、「国民」という言葉が英語の《people》という言葉の訳語として使われていること、ただちに気がつく。他に《a.japanese national》といった表現も何力所か登場し、これらは「日本国民」と訳されているが、ともあれ《people》という英語はすべて「国民」と訳されているのである。このことは《peo-

ple》という言葉のもつふくらみ、ある意味では曖昧さというふうなものを狭隘な「国家」概念のなかに封じ込め、結果として日本国憲法をその見かけとは裏腹に「国際性」とぼしめしものにしてしまっている。そして、この一節の「自注」として次のように記している。T・A・ヒンソンの『日本占領回想記』によれば、彼は《people》の訳語を「人民」という訳語に修正するように申し入れたが受け入れられなかったという。ここに《people》の訳語としての「人民」という言葉の現代日本人にとってのアクチュアリティが浮上する。日本国憲法の「国民」は今こそ「人民」と読み替えてみる必要があるのだ。その意味で、訳者がこの原語の多義性を自覚しながら(「原著タイトルの《people》という言葉は、多義的な語であり、日本語でも通常文脈に応じて「人民」、「民衆」、「大衆」、「民族」、「国民」などさまざまに訳し分けられている)、理由はどうであれ本書のタイトルに使われているこの原語に「人民」という訳語をあつたのは時宜を得た選

択であると言えらるう。さて、本書はこの多義性=曖昧性をはらんだ《people》=「人民」という語をめぐる六人の論者の持論を集成したものである。本書の編者の位置に立つアラン・バディウは、「人民」という言葉の政治的用法の歴史を概観しながら、反国家的方向へこの言葉の意味を誘導しようとする。ピエール・ブルデューは、「人民」の原語《people》の形容詞《populaire》という語の使用われ方を社会言語学的に考察しながら、この語を支配・被支配の二項対立的軸から救済する方向に未来を見いだそうとする。ジュディス・バトラは「アラブの春」で盛んに使用された「われわれ人民」という表現に注目しながら、「われわれ」の多様性が「人民」として構成される機微を考察し、「人民主権」への道を展望する。ジョルジュ・ディディエール・ジュルマンは、歴史の弁証法的解釈のなかで軽視されてきた「情動」の果たす役割を重視し、これを「民衆」「人民」の實在的根拠にしようとする。チュニシア出身の

政治学者サドリ・キアリは、民族的・文化的マイノリティ(移民)を排除しない「人民」概念の再構築を試みる。ジャック・ランシエールは、右のポピュリズムと左のポピュリズムをともに排するところに、「民衆・人民」の真の政治的未來がかかっていることを示唆する。かくして、本書は「人民」「民衆」という言葉=概念を軸にして、それぞれの論者が独自の立場から「分裂共生」しながら現代世界の政治的現実を映し出すという構成になっている。グローバルゼーションの進行と逆説的に交わるかたちでナショナリズムが顕著に台頭してきている現在、このいずれでもない、いわばローカルな現実には依拠した民衆の横断的世界連帯を追求する第三の道を展望していくうえで、本書は有益な役割を果たすことができるだろう。とりわけ日本国憲法の「国民」を「人民」と読み替えて世界的状況と結合することが喫緊の課題となっているのが国の現状を分析するのに重要な手がかりを与えてくれるだろう。(現代思想研究)